

Title	レッシング『人類の教育』
Author(s)	安酸, 敏眞
Citation	聖学院大学論叢, 9(1): 119-138
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=644
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

レッシング『人類の教育』

安 酸 敏 眞 訳

G. E. Lessing. *The Education of the Human Race*

Translated by

Toshimasa YASUKATA

Presented here is a translation of Gotthold Ephraim Lessing's *Erziehung des Menschengeschlechts* (1780), a theological or religious-philosophical tract said to be of great importance for German thinkers of later generations. Though several versions are already available in Japanese, the translator has attempted a new translation of this elusive manifesto on the basis of his own overall interpretation of Lessing's philosophy of religion. The translation is based on vol. 13 of the standard edition of Lachmann and Muncker, *Gotthold Ephraim Lessings Sämtliche Schriften* (1886-1924, reprinted in 1968). The translator has benefited from Henry Chadwick's superb English translation wherever the meaning of sentences was ambiguous due to complicated syntax and/or the frequent use of rhetoric.

訳者まえがき

本稿は Gotthold Ephraim Lessing, *Die Erziehung des Menschengeschlechts* (1780) の翻訳である。底本には、Gotthold Ephraim Lessing, *Sämtliche Schriften*, 3. Aufl., hrsg. v. K. Lachmann & F. Muncker (Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1968), Bd. 13 を用いた。

翻訳に際しては、ヘンリー・チャドウィックによる卓越した英訳 (*Lessing's Theological Writings*, selected and translated by H. Chadwick [Stanford: Stanford University Press, 1957] pp. 82-98 所収) を逐一参照し、特に原文が難解な箇所においては解釈上の大きな示唆を受けた。

また西村貞二、有川眞太郎、谷口郁夫といった先達による既存の邦訳も参照し、訳者の判断によって、既存のいずれかの訳文を部分的に採用させて頂いた箇所もなくはない。しかし全体としては、原典に基づいて訳者なりの釈義と語感にしたがって訳出した。

Key words; Education, Enlightenment, Human Race, Lessing, Revelation

コレラスベテノコトハ、或ル点ニオイテ偽デアルトイウ理由ニヨリ、或ル点ニオイテハ真デアル。

アウグスティヌス

編集者の序言

わたしは本論文の前半を自分の『論集』において公表した。いまやわたしは残りの部分を続けて出すことができる。

著者はそこでは丘の上に身を置いており、そこからすれば今日のお決まりの道よりは幾分かすぐれたものを見渡すことができると信じている。

だからといって著者は、一刻も早く宿に着くことだけを願っているせっかちな旅人を、その小径から呼び寄せたりはしない。著者は、自分をうっとりさせさせる眺望が他のすべての人の目をもうっとりさせなければならない、などとは要求しない。

だから、わたしが思うには、彼を現に立って感嘆している場所に、そのまま立たせて感嘆させておいてもよいのではなかろうか！

穏やかな夕映えを彼の目から完全に覆い隠しもせず、また彼の目に完全にあらわにもしない果てしない遠方から、わたしがこれまでしばしばそれに窮してきたひとつの暗示を、ひょっとして彼が携えてきてくれるとしたら！

わたしが言うのはこの暗示のことである。——なぜわれわれは実定宗教のあるものを冷笑したり、それに腹立てたりする代わりに、むしろすべての実定宗教のなかに、あらゆる場所の人間悟性がひとえにそれに沿って発展することができ、また今後もそれに沿って更に発展すべきであるような行程をのみ認めようとししないのか？ 最善の世界においては、こうしたわれわれの侮蔑、こうしたわれわれの憤慨に値するものは何もないであろう。それとも宗教だけはこれに値すべきだというのだろうか？ 神はあらゆることに関与されるが、われわれの過ちにだけは関与されないというのだろうか？

人類の教育

§ 1 個々の人間において教育にあたるものが、全人類においては啓示にあたる。

§ 2 教育とは個々の人間に生起する啓示である。そして啓示とは人類に生起した、そしていまもなお生起する教育である。

§ 3 教育をこのような見地から考察することが、果たして教育学において有益であり得るかどう

か、わたしはここでそれを論究するつもりはない。しかし啓示を人類の教育と考えれば、神学においてはたしかに非常に有益であり、かつまた多くの困難を取り除くことができる。

§ 4 教育は、人間が自分自身からしても手に入れることができないようなものを、人間に与えない。教育は人間が自分自身から手に入れることができるものを、ただより迅速に、かつより容易に、人間に与えるだけのことである。それゆえ啓示もまた人類に、人間理性が独力では到達することもできないようなものを何も与えない。そうではなく、啓示はこれらの事柄のうちの最も重要なものを、人類にただより早く与え、また与えるだけのことである。

§ 5 そして、どのような秩序において人間の力を発展させるかということが、教育にとってどうでもよいことではないのと同じように、また教育が人間にすべてのものを一挙に教えることができないのと同じように、神もまたその啓示において一定の秩序、一定の尺度を有しておられるに違いない。

§ 6 たとえ最初人間が唯一なる神の概念を直ちに賦与されたとしても、この分かち与えられた、したがって獲得されたのではない概念は、その純粹性のうちに長くとどまることはできなかった。自己自身に委ねられた人間理性がその概念に手を加え始めるや否や、人間理性は唯一の測りがたいものをいくつもの測り得るものに解体し、これらの部分の各々に目印をつけたのであった。

§ 7 かくして、自然のなりゆきとして、多神教と偶像崇拜が生じた。そしてどこにでも、またいつの時代にも、それが邪路であることを認識している個々の人間がいたとしても、もし神が新たな衝撃によって人間理性によりよい方向を与えることを嘉されなかったとしたら、人間理性は何百万年もおこの邪路をうろつき回っていたことが、誰が知っていたか。

§ 8 しかしながら、神は個々の人間ひとりひとりに御自身を啓示することがもはやできず、またそうしようともされなかったので、神は特別な教育を施すためにあるひとつの民族を選ばれた。しかもその民族とともに全面的に新規蒔き直しができるように、まさに最も粗野で最も野蛮な民族を選ばれた。

§ 9 これがイスラエル民族であったが、このイスラエル民族については、彼らがエジプトでいかなる神を崇拝していたかは皆目わからない。なぜなら、きわめて蔑視されていた奴隷たちは、エジプト人の礼拝には参与することが許されなかったからである。そしてイスラエル民族の父祖の神は、彼らには全く知られざるものとなっていた。

§ 10 おそらくエジプト人たちは、イスラエル民族に対してすべての神、すべての神々を厳禁し、自分たちにはいかなる神、いかなる神々も全く存在せず、神や神々を有するのはより優れたエジプト人たちにのみ与えられた特権であると、彼らに信じこませたのであろう。しかもそれは、公正であるかのようにきわめて仰々しく見せかけながら、イスラエル民族を虐げることができるようにするためであった。——今日でもキリスト教徒は、自分たちの奴隷を大いに違った仕方扱っているだろうか？——

§ 11 このように神は、未開の民族に対して、はじめは単に彼らの父祖の神として御自身を告知されたのであるが、これは彼らにも神が与えられているとの観念だけでもまずは彼らに知らせ、彼らをその観念に親しませるためであった。

§ 12 神は奇蹟をもってイスラエル民族をエジプトから導き出し、カナンへ導き入れられたのであるが、この奇蹟によってその後すぐ神は、御自身が他のいかなる神よりも権能ある神であることを、イスラエル民族に証明された。

§ 13 そして神は引き続き、御自身をあらゆるもののなかで最高の権能を有するものであるとイスラエル民族に証明することによって、——ところでそのようなものはただひとつしか存在し得ない、——彼らを徐々に唯一者の概念に慣れさせられた。

§ 14 しかしこの唯一者の概念は、理性がずっと後になってようやく無限者の概念から確実に推論するようになる唯一者の真の超越論的概念よりも、依然として何と遥かに劣っていたことか！

§ 15 たとえこの民族のなかの比較的優れた人々が、多かれ少なかれこの概念に近づいていたとはいえ、この民族はやはり長らく唯一者の真の概念にまで高まることができなかった。そしてこのことが、なぜこの民族がああもしばしば彼らの唯一なる神を見捨てて、他の民族の何か別の神のうちに唯一者、つまり最高の権能者を見いだせると信じたのかということの、唯一の真の原因であった。

§ 16 しかし、そのように粗野で、抽象的思考にそのように不向きで、いまだそのように全く幼年期にあった民族は、一体どのような道徳的教育を受けることができたであろうか？ 幼年期の年齢に相応しい教育以外は受けることができなかった。すなわち、感覚に直接訴える信賞必罰の教育である。

§ 17 したがって、ここでもまた教育と啓示は一致する。神はいまだその民族に、それを遵守する

か遵守しないかで、この世で幸福になる望みが得られたり、不幸になることを恐れたりする類のもの以外には、いかなる宗教も、いかなる律法も与えることができなかった。なぜなら、彼らの目はまだ現世よりも遠くには及ばなかったからである。彼らは靈魂の不滅ということについては毫も知らなかった。彼らは来世についていささかの憧憬も抱かなかった。それなのに、彼らの理性にはまだ全くといっていいほど手の負えないこれらの事柄を、彼らにすでに啓示するようなことを神がされたとすれば、それは子供を基礎からみっちり教える代わりに、むしろ子供をせき立て、その子のことで自慢しようとする、見栄っ張りの教育家の犯す過ちに他ならなかったであろう。

§ 18 けれども、そのように粗野な民族の、神がそれを用いてあのように全面的に新規蒔き直しをしなければならなかった民族の、この教育は何のためだったのか、とひとは問うであろう。わたしは答えよう。時が経つにつれてこの民族の各成員をできるだけ確実に他のすべての民族の教育者として用いることができるためであった、と。神はこの民族のうちに人類の将来の教育者を教育されたのである。このような教育者となったのがユダヤ人である。そしてユダヤ人のみが、あのように教育された民族の出身者のみが、このような教育者となることができたのである。

§ 19 それでは更に続けよう。この子どもが撲たれたり撫でられたりしながら成長し、いまや分別のつく年頃に達したとき、父は突然その子を異郷に追いやった。そしてその地でこの子は、父の家にいたとき持っていたのにそれとは識らずにいた善きものを、突如として認識したのである。

§ 20 神が自ら選んだ民を幼年期の教育のあらゆる段階を通して導いておられた間に、地上の他の民族たちは理性の光によって自分たちの道を歩き続けていた。これらの民族の大半は選ばれた民に遥かに後れをとっており、若干の民族だけがそれに先んじていた。そしてこのようなことも、ひとりで成長するにまかされた子どもに起こることである。多数の者は全く粗野なままであるが、若干の者だけは驚くばかりに自己を形成するのである。

§ 21 だが、これらのより幸運に恵まれた若干の子どもの存在が、教育の有益性と必要性とに対して何の反証にもならないのと同じように、今まで神認識においてすら選ばれた民よりも優位に立っていると思われる、異教の民族がいくつか存在するからといって、そのことは啓示の反証にはならない。教育を受けた子どもは、ゆっくりとしてはいるが、確実な足取りで歩き始める。彼は多くのより恵まれた立場にある自然の子どもたちに追いつき、その後はもう二度と彼らに追いつかれはしない。

§ 22 同様に、——旧約聖書のなかに見い出せるとも、見い出せないともいえる神の単一性に関す

る教理はさておくとして、——少なくとも靈魂の不滅の教理や、それと関連のある来世における信賞必罰の教理が、旧約聖書においては全くなじみのないものであるという事実は、必ずしもこの書物が神的起源を有していることに対する反証とはならないといえよう。そういう教理について触れられていないとしても、そこに含まれている奇蹟や預言は、すべてそれなりの正当性を十分にもつことができる。なぜなら、それらの教理は旧約聖書においては欠けているだけでなく、それどころか真実ですらないと仮定してみよう。本当に人間にとってはこの世ですべてが終わってしまうと仮定してみよう。このように仮定したからといって、このことのゆえに神の存在がより証明されなくなるであろうか？ このことゆえに、このはかない人類のなかの或る民族のこの世での運命に直接関与することが、神にとってより意のままにならなくなり、神にとってよりふさわしくないことになるであろうか？ 神がユダヤ人に対してなされた奇蹟も、神が彼らを通して記録させられた預言も、それらが起り、記録されたときに生きていた数少ない、やがては死すべきユダヤ人のためだけのものでは決してなかった。神は全ユダヤ民族、全人類を意図してそれらの奇蹟や預言をなされた。すなわち、たとえ個々のユダヤ人や個々の人間が永久に死んでしまおうとも、おそらくこの地上に永遠に生き続けるであろう、全ユダヤ民族と全人類を意図してなされた。

§ 23 再度繰り返そう。旧約聖書にかの教理〔靈魂の不滅の教理と、来世における信賞必罰の教理〕が欠如しているからといって、このことは旧約聖書が神的性格を有していることの反証とはならない。モーセの律法の制裁規定は現世にしか適用されなかったが、それにもかかわらず彼はやはり彼から遣わされたのである。というのは、なぜ現世を超えて適用されなければならないのだろうか？ モーセはたしかにイスラエル民族に対してのみ、しかもその当時のイスラエル民族に対して遣わされたのであった。そして彼に委託された任務はその当時のイスラエル民族の知識や能力や性向にも、将来のイスラエル民族の使命にも、完全にふさわしいものであった。これで十分である。

§ 24 ウォーバートンも、およそこの点までは進まなければならなかったにせよ、それ以上は進むべきではなかった。けれどもこの学者は節度をわきまえていなかった。例の教理が欠如しているからといって、モーセが神によって遣わされたということが台無しになるのではないということに、彼は満足しなかった。むしろ彼にとっては、この欠如はモーセが神から遣わされたということの証明にすらなるべきだというのである。そしてもし彼が、そのような律法はそのような民族にこそふさわしいということから、この証明を導き出そうとしたのであればよかったのであるが！ ところが彼はモーセからキリストに至るまで間断なく続いている奇蹟に逃げ道を求めた。つまり、神はこの奇蹟によって、個々のユダヤ人を彼らが律法に従うか従わないかに応じて、幸福にしたり不幸にしたりされた、というのである。かの教理なくしてはいかなる国家も存立することができないであろうが、この奇蹟こそはかの教理の欠如を埋め合わせるものであり、そしてそのような埋め合わせ

こそ、あの欠如が一見したところ否定しているように見えるものを、まさに証明するものである、
 というのである。

§ 25 ウォーバートンはイスラエルの神政政治の本質を持続的な奇蹟のうちに置いたのであるが、
 彼がこの持続的な奇蹟を何ものによっても確証できず、何ものによってももっともらしくすることが
 できなかったことは、なんと結構なことであつたろう。なぜなら、もし彼がそれをやりおおせて
 いたならば、実際のところ——彼はそのとき初めて困難を解決しがたいものにしてしまったであろ
 うから。——少なくとも私にはそう思われる。——というのは、モーセを遣わしたのは神であつた
 ということによって再び取り戻されるはずのものが、神がその当時には伝達しようとされなかった
 もの、人々が達成するのを妨げようともたしかにされなかった事柄そのものによって、疑わしい
 ものにされてしまったであろうから。

§ 26 私は啓示と一対をなしているものによって、私の考えを説明しよう。子どものための初級教
 科書は、教師が読者対象となっている当の子ども能力にはまだ不適切であると判断するなら、そ
 れが講ずる学問や学芸のうちのあれやこれやの重要な箇所を、黙って省いても一向に差しつかえな
 い。しかしそうした初級教科書でも、差し控えられた重要な箇所へと子どもたちが進んで行く道を
 遮ったり阻んだりするようなものを、断じて含んでいてはならない。むしろこうした重要な箇所へ
 と至るあらゆる通路が、彼らのために慎重に開かれていなければならない。そして、これらの通路
 のたった一つからでも彼らをはずれさせたり、あるいは彼らが足を踏み入れるのを遅らせたりする
 としたら、ただもうそれだけで初級教科書の不完全さは、その本質的欠陥となってしまうであろう。

§ 27 それゆえにまた、旧約聖書においても、すなわち未開で思索に未熟なイスラエル民族のため
 に書かれたこれらの初級教科書においても、靈魂不滅の教理とか来世における報いという教理が欠
 けていても一向にかまわなかったであろう。けれども旧約聖書はこの民族のために書かれた手前、
 それは彼らがこの偉大な真理へと到達しようとする歩みをいささかでも遅らせるようなものを含ん
 でいては断じてならなかった。そして、控え目に言っても、現世において素晴らしい報いがある
 というあの教えがそこで約束されていること、しかも守れない約束はひとつもしない方によって約束
 されていること、このこと以上にこの民族の歩みを遅らせるものがあつたであろうか？

§ 28 なぜなら、美德や悪徳がいささかも顧慮されていないように思われるこの世の財産の不公平
 な分配からは、靈魂の不滅に対しても、そしてあの〔不公平な分配という〕難点が解消するところ
 の来世に対しても、最も厳密な証明をすることはできないとしても、それにもかかわらず人間悟性
 は、あの難点がなければ、なお長い間——そしてもしかすると永久に——それよりも優れたより厳

密な証明に到達しなかったであろうということは、おそらくたしかだからである。なぜなら、何がこのより優れた証明を求めるように人間悟性を駆り立てることができるというのだろうか？ 単なる好奇心だろうか？

§ 29 もちろん、いろいろなイスラエル人がおり、なかには国家全体にかかわる神の約束や威嚇を国家の成員ひとりひとりに及ぼして、敬虔な者はまた幸福でなければならない、そして不幸であったり不幸になったりする者は、自らの悪行の罰を受けており、しかもこの罰はその人が自らの悪行をやめればすぐに再び祝福に転ずる、と固く信じていた人もいたかもしれない。——そのような人のひとりがヨブ記を書いたものと思われる。というのは、ヨブ記の構想は全くこのような精神に存しているからである。——

§ 30 しかし、日々の経験がこのような信念を強めることなどあり得なかった。つまり、こうした経験をした民族においては、彼らにまだ周知のものとなっていない真理を認識し受け容れることなど、永久に、永久に起こりようがなかった。なぜなら、もし敬虔な人間は必ず幸福であり、そしてその人の満足感[・]は死の恐ろしい想念によって断ち切られることなく、その人は老齢になり人生を満喫して死ぬのであるということも、ともにその人の幸福の一部をなしていたとすれば、どうしてその人は来世に憧れたりすることができたであろうか？ どうして憧れてもないものについて思案することができたであろうか？ しかし、もし敬虔な人間がそれについて思案しなかったとしたら、一体誰がそうしたと言うのか？ 悪人が、とでも言うのか？ 自らの悪行の罰を痛感し、そして現世を呪詛するときには喜んで一切の来世も断念した悪人がか？

§ 31 イスラエル人のなかには、靈魂の不滅と来世における報いを、律法はそれらのことに関して何も述べていないという理由で、あけすけにきっぱりと否定した人がいたということは、このことと比べたらはるかに大したことではなかった。ある個人がそれを否定したとしても——たとえそれがソロモンのような人であったとしても——〔民族〕共通の悟性の進歩は阻めなかった。そしてこのような否定それ自体がすでに、民族はいまや大きく一步を踏み出して真理にいっそう近づいたことの証であった。というのは、個々人は多くの人々が熟慮したことを否定しているにすぎないからである。そしてそれまでは全く気にもかけられなかったことを熟慮するということは、認識へと至る道をすでに半分進んだことになる。

§ 32 われわれはまた次のことを認めようではないか。神の律法を単にそれが神の律法だからという理由で守るのであって、神が律法を守る者に現世と来世において報いることを約束されたからという理由で守るのではないということ、つまり、たとえ来世における報いには全く絶望し、現世に

密な証明に到達しなかったであろうということは、おそらくたしかだからである。なぜなら、何がこのより優れた証明を求めるように人間悟性を駆り立てることができるというのだろうか？ 単なる好奇心だろうか？

§ 29 もちろん、いろいろなイスラエル人がおり、なかには国家全体にかかわる神の約束や威嚇を国家の成員ひとりひとりに及ぼして、敬虔な者はまた幸福でなければならない、そして不幸であったり不幸になったりする者は、自らの悪行の罰を受けており、しかもこの罰はその人が自らの悪行をやめればすぐに再び祝福に転ずる、と固く信じていた人もいたかもしれない。——そのような人のひとりがヨブ記を書いたものと思われる。というのは、ヨブ記の構想は全くこのような精神に存しているからである。——

§ 30 しかし、日々の経験がこのような信念を強めることなどあり得なかった。つまり、こうした経験をした民族においては、彼らにまだ周知のものとなっていない真理を認識し受け容れることなど、永久に、永久に起こりようがなかった。なぜなら、もし敬虔な人間は必ず幸福であり、そしてその人の満足感¹は死の恐ろしい想念によって断ち切られることなく、その人は老齢になり人生を満喫して死ぬのであるということも、ともにその人の幸福の一部をなしていたとすれば、どうしてその人は来世に憧れたりすることができたであろうか？ どうして憧れてもないものについて思案することができたであろうか？ しかし、もし敬虔な人間がそれについて思案しなかったとしたら、一体誰がそうしたと言うのか？ 悪人が、とでも言うのか？ 自らの悪行の罰を痛感し、そして現世を呪咀するときには喜んで一切の来世も断念した悪人がか？

§ 31 イスラエル人のなかには、靈魂の不滅と来世における報いを、律法はそれらのことに関して何も述べていないという理由で、あけすけにきっぱりと否定した人がいたということは、このことと比べたらはるかに大したことではなかった。ある個人がそれを否定したとしても——たとえそれがソロモンのような人であったとしても——〔民族〕共通の悟性の進歩は阻めなかった。そしてこのような否定それ自体がすでに、民族はいまや大きく一步を踏み出して真理にいっそう近づいたことの証であった。というのは、個々人は多くの人々が熟慮したことを否定しているにすぎないからである。そしてそれまでは全く気にもかけられなかったことを熟慮するということは、認識へと至る道をすでに半分進んだことになる。

§ 32 われわれはまた次のことを認めようではないか。神の律法を単にそれが神の律法だからという理由で守るのであって、神が律法を守る者に現世と来世において報いることを約束されたからという理由で守るのではないということ、つまり、たとえ来世における報いには全く絶望し、現世に

おける報いも完全に確信しているのではないとしても、それにもかかわらず神の律法を守るということ、このことは英雄的な従順さである、と。

§ 33 神に対するこのような英雄的な従順さのなかで教育された民族は、全く特殊な神意を遂行するように定められており、他のあらゆる民族よりも遂行する能力があるはずではなかろうか？——指揮官に盲目的に服従する兵士に、その指揮官の賢明さをも確信させたとしたら、その場合この指揮官が取えてその兵士を使って遂行してはならないものは何か、述べてみよ。——

§ 34 ユダヤ民族はまだ、彼らの神ヤハウェをあらゆる神々のなかで最も賢明な神というよりも、むしろ最も強力な神として崇拜していた。彼らはまだこの神を愛していたというよりも、むしろ嫉妬深い神として恐れていた。このこともまた、彼らがその至高なる唯一神についてもっていた概念は、われわれが神についてもたなければならない正しい概念では必ずしもなかった、ということの証拠となる。ところがいまや、彼らのこの概念が拡大され、洗練され、訂正されるべきときがやってきた。そうするために、神は全く自然な手段を用いられた。すなわち、神はより優れた、より正確な尺度を用いられたのであるが、この尺度にしたがって彼らは神を評価する機会を手に入れた。

§ 35 ユダヤ民族はそれまでは神を、彼らが絶えず嫉妬しながら生きてきた近隣の未開少数民族が崇拜する哀れむべき偶像との対比でしか評価してこなかった。ところがそれにかわって彼らは、賢明なペルシア人のもとに囚われの身になっている間に、熟達した理性が認識し崇拜するような、あらゆる存在のなかの存在との対比において、神を測り始めたのである。

§ 36 かつては啓示が彼らの理性を導いた。それがいまや、理性が突如として彼らの啓示を解明した。

§ 37 これは、〔理性と啓示の〕両者が互いに対して行なった最初の相互奉仕であった。そして両者を創り出した者にとっては、そのような相互的な影響の及ぼし合いはあるまじきことであるところか、かえってそのような相互的作用なしには、両者のうちの一方は余計なものとなってしまったであろう。

§ 38 異郷の地へ送られたこの子どもは、自分たちよりもより多くのことを知っており、より礼儀正しく生活している他所の子どもたちを見て、いたく恥じ入り、なぜわたしもそれを知らなかったのか、なぜわたしもそんなふうに生活しなかったのか、わたしの父の家でもそれをわたしに教えてくれてもよかったのではないか、そうするようにわたしを促してくれるべきではなかったのか、と

自問した。そこで彼らは、とうの昔にむかつくものとなっていた初級教科書をもう一度引っ張り出したが、それはこの初級教科書に責任を転嫁するためであった。するとどうだろう！ 彼らはなぜ自分たちがとうの昔にまさにそのことを知らず、まさにそのように生活しなかったのか、その責任はこの本にあるのではなく、専ら自分たちにあるということを悟るのである。

§ 39 いまやユダヤ人たちは、自分たちの教えよりもより純粋なベルシア人の教えに刺激されて、自分たちの神ヤハウエのなかに、単にあらゆる民族神のなかの最も偉大な民族神ではなく、神を認識した。彼らは神がそのようなものであることを、再び取り出して繙いた自分たちの聖書のなかで見だし、それを他の人々に示すことができたのであるが、彼らはこのような神が実際に聖書のなかに記されていただけに、それだけ容易にそれをなすことができた。彼らはこの神についての感覚的表象に対しては、ベルシア人がつねに感じていたのと全く同じくらい激しい嫌悪を示した。あるいはとにかく、そうした嫌悪をもつようにこの書物のなかでは命じられていた。以上のような理由から、このような神を礼拝する彼らがキュロス王のお気に召したのも、不思議なことではなかった。キュロス王はユダヤ人の礼拝を、純粋な拝星教にはまだ遥かに劣りはするものの、ユダヤ人がいなくなった土地をユダヤ人に代わって占領してしまった粗雑な偶像崇拜よりも遥かに優れたものと認識していたのである。

§ 40 このようにユダヤ人は、それとは気づかずに所有していた自分たちの財宝について啓発されて帰郷し、それまでとは全く異なった民族となった。その彼らがまず最初に気遣ったことは、この啓発を自分たちの間で永続的なものにするのであった。すぐに彼らの間で背教とか偶像崇拜ということはもはや考えられないものとなった。というのも、民族神に対してならば背信することはありうるが、神に対しては一度認識したならば、背信することは決してあり得ないからである。

§ 41 神学者たちは、ユダヤ民族に生じたこのような全面的な変化を、さまざまに説明しようとしてきた。そしてこれらのさまざまな説明がすべて不十分であることを非常によく示したひとりの神学者は、最終的に、「バビロン捕囚とそこからの帰還について述べられたり書かれたりした預言が明確に成就されたこと」を、かの変化の真の原因であると申し立てようとした。しかしこの原因ですら、いまようやく高尚なものとなった神概念を前提するかぎりにおいてのみ、真の原因であることができる。ユダヤ人は、奇蹟を行なったり、未来を予言したりするのは、神にのみふさわしいということ、いまやはじめて認識したにちがいがなかった。彼らは以前にはこの両方を行なう力を偽の偶像ももっていると考えていた。まさにそのために、奇蹟や預言はそれまでは彼らに薄弱で一時的な印象しか与えなかったのである。

§ 42 疑いもなく、ユダヤ人はカルデア人やペルシア人のもとで、靈魂の不滅の教理にも一層熟知するようになった。彼らはエジプトでギリシアの哲学者たちのいろいろな学派に触れて、この教理に一層精通するようになった。

§ 43 けれども、彼らの聖書を考慮に入れた場合、この教理に関する事情は、神の唯一性と特質についての教理とは異なっていた。すなわち、前者は聖書のなかでは感性的な民族によってひどく無視されたが、後者は追求されなければならなかった。その上に、靈魂の不滅の教理にいたるには、予備的訓練が必要であった。それゆえ、それについては、ほのめかし (Anspielung) と暗示 (Fingerzeige) しか行なわれなかった。以上のような次第で、靈魂の不滅に対する信仰は、当然のことながら、民族全体の信仰とはなり得なかった。この信仰は民族のうちのある一宗派の信仰にすぎなかったし、またそういうものであり続けた。

§ 44 わたしが靈魂の不滅の教理のための予備的訓練 (Vortübung) と呼ぶのは、例えば、父の悪行を子に報い、三、四代にまでわたって罰するという神の威嚇のことである。こうした威嚇が、父親たちに末代の子孫のことも考えて生活し、自分たちがこの無事の者たちにもたらす不幸を前もって感得する習慣をつけさせた。

§ 45 わたしがほのめかしと呼ぶのは、単に好奇心を刺激したり、問いを誘発したりするもののことである。例えば、死ぬという代わりに、父祖たちのもとに加えられるといった、よく耳にする言い回しのことである。

§ 46 わたしが暗示と呼ぶのは、まだ差し控えられている真理がそこから発展させられ得る、何らかの萌芽をすでに含んでいるもののことである。アブラハム、イサク、ヤコブの神という名称からキリストが行なっている推論はこの種のものであった。このような暗示は、もちろん厳密な証明へと発展させることができる、とわたしには思われる。

§ 47 初級教科書が有する積極的な完全性は、そのような予備的訓練、ほのめかし、暗示に存している。それは、まだ差し控えられている真理への道を困難にしたり、遮ったりしないという、先に述べた特質が、初級教科書の消極的な完全性であったのと同じである。

§ 48 これに表現形式と文体をさらにつけ加えたい。—— (1) 見過ごしにすると具合のよくない抽象的真理を寓話の形で表現したり、教訓に富んだ個々の事象が実際に起こったこととして物語られる場合である。生成する一日というイメージのもとに物語られる創造や、禁断の木の物語におけ

る道徳的悪の起源や、バベルの塔の物語における様々な言語の発生などが、この種のものである。

§ 49 (2) 文体。——それはあるときは平明かつ単純であり、またあるときは詩的で、全く同語反復に満ちている。だが、あるときは別のことを言っているように見えるのに、実際には同じことを言っていたり、またあるときは同じことを言っているように見えるのに、根本的には別のことを意味していたり、あるいは意味することができることによって、文体は洞察力を培うものである。

§ 50 子どもや幼年期の民族のための初級教科書が具えている長所は、これで全部である。

§ 51 しかし、いかなる初級教科書も或る一定の年齢層のためにだけある。その年齢を過ぎた子どもを、当初の意図以上に長くそこにひきとどめておくのは有害である。なぜなら、ひきとどめることを多少なりとも有益な仕方になしうするためには、初級教科書のなかに実際あるよりも多くのものを読み込んで解釈しなければならず、初級教科書が含むことのできる以上のものを持ち込まなければならないからである。ほのめかしや暗示をあまりにもしつこく追い求めたり行なったりし、寓喩をあまりにも厳格なふるいにかけて捨象し、事例をあまりに委細に解釈し、字句にあまりにも強い圧力をかけなければならない。こうしたことで、子どもはこせこせした、ひねくれてやたらと些事にこだわる頭脳の持ち主となるのである。すなわち、こうしたことが子どもをやたらと神秘的かつ迷信的にし、すべて平明なものや容易なものに対して、輕蔑の念で心を満たすことになるのである。

§ 52 ラビたちが彼らの聖書を扱ったのとまさに同じやり方ではないか！ 彼らがそれによって自分たちの民族の精神に賦与したのとまさに同じ性格ではないか！

§ 53 より優れた教育者がやって来て、子どもの手から使い尽くした初級教科書をもぎ取らなければならない。——かくして、キリストがやって来た。

§ 54 神がひとつの教育計画の中へ入れようと意図された人類の一部分——神は、言語、行為、統治、及びその他の自然的・政治的な諸関係によって既にそれ自体において結合しているような、一部分のみをひとつの教育計画の中へ入れようと意図されたのであるが——は、教育の偉大な第二歩を踏み出せるほどに成熟していた。

§ 55 すなわち、人類のこの部分は、理性の行使において非常なる進歩をとげ、自分たちの道徳的行為のために、それまで彼らを導いてきた現世における信賞必罰よりも高尚で、より賞賛に値する

動機を必要とし、またこれを用いることができた。子どもが少年になる。お菓子やおもちゃに代わって、兄や姉たちと同じように、自由になり、尊敬され、幸福になりたいという欲望が芽生えてくる。

§ 56 人類のあの部分の中のよりすぐれた人々は、ずっと以前から、そのようなより高尚な動機とおほしきものによって支配されることに馴れていた。この世の生を終えた後、せめて同胞の記憶の中にだけでも生き続けるために、ギリシア人やローマ人はどんなことでもしたのであった。

§ 57 この世の生を終えた後に待望されるべきもう一つの真実の生が、少年の行為に影響をおよぼす時が到来した。

§ 58 かくしてキリストは、靈魂の不滅について教示する最初の信頼すべき実践的な教師となったのである。

§ 59 最初の信頼すべき教師。——キリストにおいて成就されたと思われた預言によって信頼すべきであり、彼が行なった奇蹟によって信頼すべきであり、彼が自分の教えを封印するのに用いた死の後、自ら復活したことによって信頼すべきである。われわれがこの復活、この奇蹟をいまお証明できるかどうかということを、わたしはさておくことにしよう。同様に、このキリストという人が誰であったかということを、われわれはさておくことにしよう。これらのことはすべて、当時キリストの教えを受け容れるために重要だったであろうが、今日ではこの教えの真理を認識するためには、もはやそれほど重要ではないのである。

§ 60 最初の実践的な教師。——というのは、靈魂の不滅を哲学的思弁として推測し、願望し、信じることと、自分の内的・外的な行為をそれに従って律することとは、別問題だからである。

§ 61 そして少なくともこのことを、キリストはまずもって教えたのである。というのも、悪しき行為はあの世でもなお罰せられるであろうとの考えは、キリスト以前にも多くの民族の間で広まっていた信仰ではあったけれども、その場合の悪しき行為というのは、市民社会に損害をもたらし、したがって市民社会において既に然るべき罰を受けるような行為に限られていたからである。来世を考慮しながら心の内的純潔を説き勧めることは、ただひとりキリストを俟って初めて行なわれたのである。

§ 62 キリストの弟子たちはこの教えを忠実に伝えた。そしてたとえ彼らには、キリストがユダヤ

人のためにのみ定めたように思われる真理を、数多くの民族の間にもより弘く広めたという以外に、格別の功績がなかったとしても、彼らはそれだけですでに人類の養育者、恩人に数え入れられなければならないであろう。

§ 63 しかし彼らがこのひとつの偉大な教えを、その真理がそれほど明瞭でもなく、その利益がそれほど著しくもないような、他の教えとまだ混ぜ合わせていたとしても、このことは致し方のないことではなからうか。そのことで彼らを叱責したりしないで、むしろこの混ぜ合わされた教えですら、人間理性にとってひとつの新しい方向を与える一撃にならなかったかどうか、真剣に調べてみよう。

§ 64 少なくとも経験からしてすでに明らかなことは、これらの教えを少し後になって保存した新約聖書は、人類のための第二の、より優れた初級教科書の役目を果たしてきたし、そしていまなおその役目を果たしているということである。

§ 65 新約聖書は、千七百年来、他のあらゆる書物にもまして人間悟性を引きつけてきたし、よしんばそれが人間悟性自体が持ち込んだ光にすぎないものであったにせよ、他のあらゆる書物にもまして人間悟性を照らしてきた。

§ 66 なにか他の書物がこのようにさまざまな民族の間でこのように広く知られることは不可能だっただろう。そしてこのように全く不ぞろいの思考法がこの同一の書物に携わったということ、このことが、各民族が自分たちのために別々に固有の初級教科書をもっていた場合よりも、人間悟性を前進させるのにより手助けとなった、ということには議論の余地がない。

§ 67 それにまた、各民族がこの書物を暫くの間自分たちの認識の極致 (Non plus ultra) と見なさなければならなかったことも、きわめて必要なことであった。なぜなら、少年といえども自分もっている初級教科書をまずはそのようなものと見なさなければならぬからである。それは、早く終えてしまいたいとせっかちになって、彼がまだ自分にその基礎ができていない事物に魅了されたりしないためである。

§ 68 そして今日でもなおきわめて重要なことはといえば、——汝、この初級教科書の最後のページにきて足を踏みならしてじりじりしている有能なる者よ、用心せよ。汝が嗅ぎつけているもの、もしくはすでに洞察し始めているものを、出来の悪い汝の学友たちに悟られぬよう用心せよ。

§ 69 これらの出来の悪い学友たちが汝に追いついてくるまでは、——むしろもう一度この初級教科書に立ち返り、汝が表現方法の変化や教授法の埋め草にすぎないと見なしているものが、ひょっとしてそれ以上のものではないかどうか調べてみるがよい。

§ 70 汝が人類の幼年期に神の単一性という教理に関して見たのは、神は単なる理性の真理をも直接的に啓示されるということである。あるいは神は、単なる理性の真理をより迅速に広め、より堅固に基礎づけるために、単なる理性の真理を直接的に啓示された真理として暫くの間教えることを許し、かつそれを奨励されたということである。

§ 71 汝は人類の少年期において、靈魂の不滅という教理に関して同様のことを経験する。この教理は、第二のより優れた初級教科書においては、啓示として説かれるのであって、人間的推論の結果として教えられないのではない。

§ 72 われわれは、神の単一性の教理のために、いまや旧約聖書なしでも済ますことができるし、またわれわれは、靈魂の不滅の教理のために、徐々に新約聖書をもなしで済ますことができはじめているが、それと同じようにこの新約聖書の中には、理性が他の確定された真理から導き出し、これらの真理と結びつけることを教えるまでは、われわれが非常に長い間啓示として驚嘆することになるような、そのような類の真理がもっと沢山幻影的に与えられているということはあるまいだろうか？

§ 73 たとえば、三位一体の教理。——もしこの教理が人間悟性を右往左往はてしなく迷わせた後、遂には、神は有限な事物が一であるという意味では一であり得ず、また神の単一性もある種の多数性を排除しないような超越論的な単一性でなければならない、ということを認識する道へと導いてゆくものであるとしたら、どうであろうか？——少なくとも神が御自身についての最も完全な表象をもっておられてはいけないのか？ すなわち御自身のうちに存在する一切のものがそこにあるような表象をである。しかし、たとえ神の必然的實在性についても、神のその他の特性についても、ただひとつの表象、ただひとつの可能性しかないとしても、神御自身のうちに存在する一切のものがその表象のうちに見出しされるというのだろうか？ この可能性は神のその他の特性の本質を言い尽くすものであるが、それはまた神の必然的實在性の本質をも言い尽くすのだろうか？ わたしにはそうは思われない。——従って、神は御自身についての完全な表象を全然もつことができないか、あるいはこの完全な表象は、神御自身がそうであるのとちょうど同じように、必然的に實在的であるか、そのいずれかである。——勿論、鏡に映ったわたしの像は、光線がその表面にあたった限りでのわたしの像にすぎないのであるから、それはわたしについての空虚な像に他ならない。し

かし、かりにいまこの像がわたし自身もっている一切のもの、例外なく一切のものをもっているとするば、その場合でもそれは依然として空虚な表象であろうか？ それとも、むしろわたしの自我の真の二重化であろうか？——もしわたしが類似の二重化を神のうちに認識できると信ずるとすれば、恐らくわたしが間違っているというよりは、むしろ言葉がわたしの概念を言い表すのに不十分なのである。そしてその限りでは、三位一体の理念を一般うけするものにしようとした人々が、神が永遠から産出された御子という名称による以外には、恐らくより平明かつ的確に表現するのが無理だったということは、依然として否定し難いことである。

§ 74 そして原罪の教理。——もしあらゆることがわれわれに最終的に次のことを認めさせるとしたら、どうであろうか？ すなわち、人間というものは、その人間性の最初のそして最低の段階においては、断じて自らの行為の主ではなく、したがって、道徳的律法には従うことができないとしたら、どうであろうか？

§ 75 そして御子の贖罪の教理。——もしあらゆることがわれわれに最終的に次のことを仮定するよう強いるとすれば、どうであろうか？ すなわち、神は人間に律法を与えず、道徳的律法なくしては考えられないあらゆる道徳的至福から人間を排除しようとするかわりに、むしろ人間の原初におけるあの不完全さにもかかわらず、人間に道徳的律法を与え、御子に鑑みて、すなわち、それと比較すれば、またそのうちに個人のいかなる不完全性も解消してしまうような、神のあらゆる完全性の自立的な広がりにも鑑みて、人間のあらゆる違反を赦そうとされたとするば、どうであろうか？

§ 76 宗教の秘義に関するその種の小理屈は禁じられているなどと、異議を唱えないで頂きたい。——秘義という言葉は、キリスト教の初期の時代には、われわれが今日その言葉のもとで理解しているものとは全く異なったものを意味していた。そして啓示された真理を理性の真理へと発展させることは、もし啓示された真理が人類の役に立つべきであるとすれば、絶対的に必要なことである。啓示された真理が啓示されたときには、もちろんそれはまだ理性の真理ではなかった。しかしそれは理性の真理となるために啓示されたのである。啓示された真理は、いわば算術の先生が生徒たちに、多少なりとも計算の方向づけにできるようにと、前もって言うておく計算の答え (Facit) のようなものであった。もし生徒たちが前もって言われた計算の答えに満足してしまったら、彼らはいつまでたっても算術が身につかないであろうし、良き教師が課題に際して生徒たちに指針を与えたその意図は、悪い仕方であつて成就されることになるだろう。

§ 77 それに、なぜわれわれが、歴史的眞理性がはなはだ疑わしいと思えるような宗教によつても

また、人間理性が独力では決して到達できないであろうような、神の本質、われわれの本性、われわれの神に対する関係などについての、より詳細でより優れた概念へと導かれることができてはならないのだろうか？

§ 78 こうした事柄についての思索がつねに災いをひき起こし、市民社会に有害になったということは真実ではない。——思索にではなく、こうした思索を制止しようとしたり、独自の思索をもった人に独自の思索を快く許そうとしない愚行や専制にこそ、こうした非難は向けられるべきである。

§ 79 むしろこの種の思索は——個々の場合どのような結果になろうとも——、人間悟性一般を最も適切に修練してくれるものなのであり、そもそも人間の心というものが、せいぜい徳をそれが永遠の幸福という結果をもたらすとの理由でしか愛せないかぎり、これについて議論の余地はない。

§ 80 なぜなら、人間の心のこの利己性のために、悟性をわれわれの身体的欲望に関するものによってのみ修練しようとすることも、悟性を錬磨するよりむしろ鈍化させることになるだろうからである。悟性は、もしそれが自らの完全な啓蒙に到達し、そしてわれわれが徳を徳それ自体のために愛することができるようにする、そのような心の純粹性をもたらすべきであるとすれば、必ずや精神的な対象によって修練されなければならない。

§ 81 それとも人類は啓蒙と純粹性というこの最高の段階には決して到達するはずはないというのか？ 決して？

§ 82 決して？——慈愛深き神よ、わたしにこのような冒瀆的な考えを抱かせないで下さい！——教育にはそれなりの目標がある。個人の場合に劣らず人類の場合にも。教育されるものは、何かのために教育されるのである。

§ 83 若者に開かれている虚栄心をくすぐるような将来への見込み。彼らに幻影的に与えられている名誉や富裕。これらのものは、名誉や富裕といったこうした将来への見込みがなくなってしまうときでも、自分の義務を履行することのできるような大人へと若者を教育するための手段以上のものであろうか？

§ 84 人間の教育はこのことを目的としている。それなのに神の教育はここまで達しないのであろうか？ 人為が個人に関してうまくやっけてのけることを、自然も全体的に関してうまくやっけてのけるてはならないというのか？ 冒瀆だ！ 冒瀆だ！

§ 85 否、それは来るだろう。それはたしかに来るだろう。完成の時期は。そのときには人間は彼の悟性がますます良くなる未来を確信すればするほど、それにもかかわらず自らの行為の動機をこの未来から借りてくる必要がなくなるだろう。なぜなら、人間は善をなすことによって恣意的な報いが与えられるからではなく、善であるがゆえに善をなすようになるからである。このような恣意的な報いにしても、かつては善の内的な、より優れた報いを認識するために、単に人間の移り気な眼差しを一点に固定し強化するはずのものであった。

§ 86 たしかに来るであろう、新しい永遠の福音の時代は。新しい契約の書たる初級教科書においてすられわれに約束されているその時代が。

§ 87 恐らく、十三～十四世紀のある熱狂主義者たちでさえ、この新しい永遠の福音の一条の光をとらえたのであろう。ただ彼らは、この新しい永遠の福音の到来をあまりに間近なものとして告知した点においてのみ、誤っていた。

§ 88 恐らく彼らの云う世界の三つの時代とやらも、それほど虚しい妄想ではなかったであろう。そして彼らが、古い契約がそうなったのとちょうど同じように、新しい契約は古くさくならざるを得ない、と説いたとき、たしかに彼らにはいささかの悪意もなかった。同一の神の同一の経緯が彼らのもとでもつねに続いていた。つねに——わたしなりの言い方をさせて貰えば——人類の普遍的教育という同じ計画が続いていた。

§ 89 ただ彼らはこの計画をせき立てすぎただけのことである。ただ彼らは、まだほとんど幼児の段階を抜けきっていない同時代人を、啓蒙もせず、準備もなしに、一気に、自分たちのいう第三の時代に相応しい大人にすることができる、と信じただけのことである。

§ 90 そしてまさにこのことが彼らを熱狂主義者にしたのである。熱狂主義者が未来を非常に正しく見通すということはよくあることである。しかし熱狂主義者はこの未来を早く到来させようと思い、しかも自分たちを通じてこの未来を早く到来させようと思う。自然が何千年もの時間をかけてすることを、自分たちが生存している一瞬のうちに熟させようとするのである。なぜなら、自分たちがより優れたものと認識するものが、自分たちの存命中にまだより優れたものにならないとしたら、何の役に立つだろうか？ 自分たちは再来するのだろうか？ 熱狂主義者は自分たちが再来すると信じているのだろうか？——このような熱狂主義がただ熱狂主義者の間だけのこととはいえ、もはや流行しなくなるのは奇妙なことである！

§ 91 永遠なる摂理よ、汝の見きわめ難い歩みを歩むがいい！ ただこのように見きわめ難いからといって、わたしが汝に絶望することだけはないようにして欲しい。——たとえ汝の歩みがわたしには後戻りしているように思われようとも、わたしが汝に絶望することのないようにして欲しい！ 最短の線がつねに直線だということは真実ではない。

§ 92 汝は、汝の永遠の途上で、かくも多くのものに関わらなければならない！ かくも多くの寄り道をしなければならない！——そして、もし人類をその完成へと接近させる大きなゆっくりと回る歯車が、ひとつひとつが別々にそれに奉仕する、より小さなより速く回る歯車によってのみ、作動させられるように決められているようなものだとしたら、どうであろうか？

§ 93 そうにちがいない！ 人類が完成へと至るまさにその道を、ひとりひとりの人間は（早い人もいれば、遅い人もいるが）まず走破しなければならない。——「同一の人生において走破しなければならないのだろうか？ ひとりひとりの人間が、まさに同一の人生において、感覚的なユダヤ人でありながら精神的なキリスト教徒であったということが、あり得るだろうか？ ひとりひとりの人間がまさに同一の人生において、両方とも凌駕してしまったということが、あり得るだろうか？」

§ 94 そんなことは恐らくあり得ない！——しかし、なぜひとりひとりの人間がこの世界に一回以上存在したことがあってはいけないのだろうか？

§ 95 この仮説がかくも滑稽であるのは、それがきわめて古い仮説だからなのか？ 人間悟性が、諸学派の詭弁によってかき乱され弱められる前に、すぐに思いついたからなのか？

§ 96 わたしもまた、単なるこの世的な罰や報いが人間にもたらすことのできる、わたしの完成へのすべての歩みをここですでに歩み終えていて、なぜいけないのだろうか？

§ 97 そして、永遠の報いへの見込みがわれわれの達成をかくも力強く手助けしてくれるすべての歩みを、いつか別の時に歩み終えていて、なぜいけないのだろうか？

§ 98 なぜわたしは新しい知識、新しい技能を獲得するのに都合が好いときに、その都度再来してはいけないというのだろうか？ わたしは一度にあまりにも多くのものを手に入れてあの世に行ったので、再来するのは全く無駄骨なのだろうか？

§ 99 だからいけないのか？——それとも、わたしがかつてこの世に存在したことがあったことを忘れているからか？ わたしがそれを忘れているとしたら、それはわたしにとって好ましいことである。自分のかつての状態を覚えているとしたら、現在の状態を悪用することを許すだけのことになるだろう。そしてわたしがいま忘れていなければならないことを、一体わたしは永遠に忘れてしまうのだろうか？

§ 100 それとも、あまりにも沢山の時間がわたしのために失われるからだろうか？——失われる？——一体わたしは何を逸してしまったのだろうか？ 永遠全体はわたしのものではないのだろうか？